

令和7年1月18日

学校関係者評価委員長様

世田谷区立用賀小学校
校長 安藤 由季子

令和6年度 世田谷区立用賀小学校自己評価報告書

<自己評価報告書を作成するに当たって>

- ・学校の重点目標ごとの具体的な方策の項目に沿って、「学校の自己評価」「保護者・地域のアンケート調査」「児童のアンケート調査」「区・都・全国学力調査」「東京都統一体力テスト」等の分析から、次年度の改善点の方向性を示していきます。
- ・「とても思う」「思う」の評価を肯定的な評価として受け止め、分析や考察に活用しています。
- ・児童調査アンケートは、毎年5、6年児童を対象としています。

令和6年度の重点目標

<自己肯定感・協働する力の育成>

- ・「学び合う活動」を通し、自分の考えを伝えること、人の思いに触れること（思いを聴く姿勢）、人の心を感じ、温かい言葉を掛け合うことを大切にする。
- ・「学びを振り返る活動」を通し、自分のよさを見付け、自分に自信をもつ。
- ・学びをもとに自分のめざす姿を思い描き（未来デザイン）、思い・願いをもとに自分らしく行動する。

<課題を解決する力の育成>

- ・自らの課題を見付け、もてる力を活用し、ねばり強く課題解決に努める。
- ・解決のための見通しをもち、必要な情報を収集したり整理分析したりして自分の考えをまとめ、表現していく。（探究的な学び）
- ・意見交流しながら協働して学び合う。
- ・学びを振り返り、次につなげる。

<健康な心や体を自ら作ろうとする力の育成>

- ・自分の心や体の調子を知り、健康な毎日を送ることにつながる自己の取組目標を決めて、前向きに取り組む。

重点目標ごとの具体的な方策

1 「キャリア・未来デザイン教育」の実現<自己肯定感・協働する力>

(1) 評価結果

【保護者アンケート調査から】

- 本校は、子どもが考えることや、課題を解決することを大切にした授業を行っている。(75.1%)
- 本校は、子どもが考えたことを話し合ったり、発表し合ったりする機会がある。(79%)
- 本校は、丁寧に指導している。(81.1%)
- 本校の学び合いや学びを振り返る活動を通して自分のよさを見付け、自分に自信をもつ取組は、よいことだと思う。(70.4%)【分からぬ 22.9%】
- △本校の教員は、子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している。(59.4%)【分からぬ 25.7%】
- △本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。(44.9%)【分からぬ 35%】

【児童アンケート調査から】

- 先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。(94.1%)
- 先生たちは、ていねいに指導してくれる。(93.7%)
- 授業では、考えたことを話し合ったり発表し合ったりする機会がある。(84.6%)
- 自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。(70.1%)
- 目標をもち、その実現に向けて努力している。(81.1%)
- 自分の考えたことや思いを友達や先生に伝えている。(79.2%)
- 私は、学校生活の中で自分の役割に責任をもって活動している。(84.6%)
- 私は、学びを振り返り、次の取組に生かそうとしている。(73.3%)

【学校の自己評価から】

- すべての教育活動において、本校独自の振り返りタイム「自問タイム」を大切にし、「自分で決める」「自分と対話する」「自分の良さを見付ける」力や態度の育成に重点的に取り組み、児童が自分自身の成長を実感しながら自身につなげられるようにしている。(96%)
- 教員が子どもたちと対話的に関わることを通し、子どもの変容や成長を価値付けながら自己肯定感を高め、さらなる意欲につなげている。(92%)
- 「キャリア・パスポート」などをもとに自らの学習状況や活動を見通したり、振り返ったりしながら自身の成長を自己評価している。(79%)
- △教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「よく考え工夫する子ども」(60%)

(2) 考察

- ・【学校の自己評価から】の○が付いている設問から見て取れるように、教員全体で意識的に行っていることが、【児童アンケート調査から】の結果が比較的肯定的な回答に繋がっていると考えられる。令和5年度の評価では、高学年になるにつれて、自分に自信がなくなることで、自分の考えを他者に伝えることに課題があったが、教員が多く伝える場面を設定した効果もあり、改善の傾向が見られる。(5年昨年度 65.8%から今年度 72.3%へ、6年昨年度 70.2%から今年度 84.5%へ)
- ・児童の「目標をもち、その実現に向けて努力している。」が 81.1% (昨年度 74.6%) と高く、「学

校生活の中で自分の役割に責任をもって活動している。」も 84.6%（昨年度 75.9%）と高く児童の肯定的評価が高かった。教職員全体で取り組んでいるキャリア・パスポート等の活用や道徳の授業の工夫や生活の中で児童が挑戦する場面が多くなったことが成果として表れていると考えられる。

・【保護者アンケートの調査から】では、分からないと回答している割合が多いため、保護者への情報提供の仕方に課題があると考える。

（3）改善策

- ① 本校独自の振り返りタイム「自問タイム」について、取組や意図について保護者に伝わるよう、ホームページや学校公開、保護者会などで積極的に授業の様子を発信する。また、今後も引き続き、学校だよりで校内研究の取組や児童の成長を載せる欄で定期的に発信する。
- ② キャリア教育の実践については、各教科、学校行事、特別活動、道徳など、学校の教育活動全体で自分の生き方や将来につながる内容を扱っているものの、保護者には捉えづらいことから、今後も引き続き、活動のねらいを共有できる授業を工夫し、保護者会や学校だよりなどで教育活動のねらいを周知していく。教育活動に保護者や地域の方が参画できるよう人的資源の活用を計画していく。また、キャリアパスポートファイルについても、引き続き、児童の振り返りにコメントを記述して価値付けすることで、キャリアパスポートファイルの蓄積から、児童が自らの成長を実感できるようにする。

2 教育のDX（デジタルトランスフォーメーション）の推進<課題を解決する力・協働する力>

（1）評価結果

【保護者アンケート調査から】
○本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。(72.4%)
○自分の子どもは、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる。(72.6%)
△本校は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している。(62.4%)【分からぬ 25.4%】
【児童アンケート調査から】
○先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。(93.3%)
○先生は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している。(86.6%)
○私は、問題を解決するために、必要な情報を集めたり、整理したりして自分の考えをまとめている。(72.1%)
○私は、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる。(76.7%)
【学校の自己評価から】
○ICTの積極的な活用により、児童の情報活用能力の向上を図るとともに、「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現し、学習効果を高めている。(97%)
○教育データやデジタル技術の活用を図り、様々な校務を効率化し、情報共有を充実させることで、校務負担の削減とともに学習や指導の効果を高めている。(89%)
△教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「ねばり強くがんばる子ども」(57%)

（2）考察

- ・児童アンケート調査結果から、「先生は映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている」の項目において、肯定的回答をした児童が 93.3% いる。GIGA スクール構想のもと、全児童への一人一台のタブレット端末配備から、校内の ICT 推進委員会を中心とした組織的・計画的な教職員の ICT 活用研修を行ってきたことで、教員の活用スキルが向上し、授業内での日常的な活用が定着したと考えられる。
- ・児童アンケート調査結果から「私は、問題を解決するために、必要な情報を集めたり、整理したりして自分の考えをまとめている。」の肯定的回答が 72.1% であり、「私は、めあてに向かってあきらめずにねばり強く取り組んでいる」の項目では、児童の肯定的回答が 76.7%、保護者の肯定的回答が 72.6% だった。学校の自己評価アンケートと合わせて考えると、映像やタブレットを活用した分かりやすい授業が実施されている一方、情報収集や整理する力、「ねばり強くがんばれる力」の向上には改善の余地が見られる。
- ・児童アンケートでは「先生は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している」の項目に対して、86.6% が肯定的回答だった。一方で保護者アンケート調査の同項目に対する肯定的回答が 62.4% と 20 ポイント以上の差があり、かつ、分からぬと回答した保護者が 25.4% いることから、保護者に授業の工夫について伝えることに課題があると考えられる。

（3）改善策

- ①今後も組織的な研修等を通じて、全教員の活用スキルを一層高めるとともに、ICT 機器を効果的に活用した授業改善を行ったり、家庭学習に ICT 機器を用いたりして、児童一人一人に応じた適切な指導を行うとともに、ホームページや学校公開等で保護者へ学習の様子を発信していく。
- ②ICT 活用する中で、個別最適化された学習だけでなく、適切な難易度で挑戦的な課題を提供し、児童が積極的に問題解決に取り組める環境を整備していく。また、学習過程でのフィードバックを素早く行い、児童が挫折感を感じることなく、粘り強く取り組むことができるようにしていく。
- ③ICT 活用と共に、協働学習の場を増やし、他の児童と助け合いながら課題に取り組むことで、ねばり強く取り組む力の育成を目指していく。

3 多様性を尊重しながら共に学び、共に育つ教育の推進<自己肯定感・協働する力>

(1) 評価結果

【保護者アンケート調査から】
○本校の学校生活は、子どもにとって楽しい。(89.3%)
○本校は、子どものことを相談しやすい。(73.8%)
○本校の、学び合いや学びを振り返る活動を通して自分のよさを見付け自分に自信をもつ取組は、効果があると思う。(70.4%)
【児童アンケート調査から】
○私は、友達の気持ちを大切にし、話を聞いている。(96.0%)
○学校生活は楽しい。(86.2%)
○先生たちに相談できる。(78.4%)
○自分を大切にしたり、自分のよさを見つけ自信をもったりしている。(76.4%)
【学校の自己評価から】
○教員が子どもたちと対話的にかかわることを通し、子どもの変容や成長を価値付けながら自己肯定感を高め、さらなる意欲をつなげている。(92%)
○教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「思いやりのあるやさしい子ども」(82%)
○すべての教育活動において人権教育を推進するとともに、区と連携した「高齢者疑似体験」「白杖体験」「手話講座」などの障がい者理解教育や、英語活動支援員やALT、地域の外国人による英語活動等の推進を通して、障がいや性、文化の違いなどに捉われず多様性を理解し、誰もが安全、安心、快適に暮らすことができるよう、お互いを理解し合い、支え合おうとする態度や力を育成している。(79%)

(2) 考察

- ・児童の「友達の気持ちを大切にし、話を聞いている」の肯定的評価は 96.0%（昨年度 83.2%）と高い結果であった。学校生活の中で友達の気持ちや存在を大切にして話を聞くことで、相手を尊重することができている。
- ・児童の「私は、自分を大切にしたり、自分のよさを見つけ自信をもったりしている」の肯定的回答は 76.4%であり、保護者の「本校の、学び合いや学びを振り返る活動を通して自分のよさを見付け自分に自信を持つ取組は、効果があると思う」についても 70.4%であった。さらに児童の自己肯定感を高めていくために、教師が一人一人のよさを見取り、伝え、認めていく必要がある。

(3) 改善策

- ①中学年では総合的な学習の時間で福祉の学習を行うが、低学年のうちから、学級の友達を認め合う活動などを行い、人権教育をすすめていく必要がある。
- ②自分づくりという目標を全教職員がより意識し、個人のよさや大切な存在であることを伝える、そうした活動を行うなどの取組を進めていく。また、他者から認められているという肯定的な学級風土の形成を目指すとともに、自己肯定感を醸成できるようにしていく。

4 地域社会と協働した教育の推進

(1) 評価結果

【保護者アンケート調査から】

- 私は、学校公開にすすんで参加している。(90.8%)
- 本校は、地域の人や施設を教育活動に生かしている。(72.1%)
- 本校は、地域の活動などに協力的である。(70.9%)
- 本校が、地域運営学校として各種地域団体の協力のもとに活動していることは、よいことだと思う。(72.1%)
- △本校は、近隣の小中学校で構成する「学び舎」による小学校・中学校の連携や交流活動が行われている。(59.3%)
- △は、学校行事、PTA や地域主催の行事などにすすんで協力している。(61.1%)
- △私は、今年度の学校重点目標を理解している。(52.4%)
- △本校は、地域に情報を提供している。(59.3%)

【学校の自己評価から】

- PTA と連携した活動が積極的に行われている。(96%)
- 地域参画型の学校運営がなされている。(90%)
- 学校は、保護者・地域の声や願いに応える教育活動を積極的に行っている。(93%)
- 地域運営学校として、学校、家庭、地域の皆様とビジョン（ゴールイメージ）を共有し、それぞれがそれぞれの立場で責任をもって子どもたちの健全育成に取り組んでいる。(90%)
- 学校運営委員会の活動が地域・保護者に伝わっている。(78%)
- 学校運営委員会で話し合われたことが教育活動に生かされている。(68%)
- 学校運営委員会の組織であるスマイルスクール支援委員会などの地域や保護者の人材や企業の CSR 活動などを利用し、さまざまな体験教室を実施し、地域・保護者と学校が一体となって児童を育てている。(89%)

(2) 考察

- ・近隣小学校との連携や交流活動は計画的に行われており、学び舎を通じた小中学校間の連携、情報交換が、教育活動を支えている。地域の人々や施設を活動に生かす取り組みも行われており、地域の活動にも協力的であることが示されている。
- ・学校行事やPTA、地域主催の行事に対する協力姿勢は高く、特に、PTA との連携が積極的に行われている。保護者や地域の声を反映した教育活動が実施されており、地域参画型の学校運営がなされているといえる。
- ・地域に対する情報提供は、59.3%（昨年度 56.0%）で行われていることが確認された。すぐ一覧やホームページの学校日記などを通じて、学校の様子を発信していることが、高い結果につながっている。また、学校運営委員会が、地域・保護者に対してその活動を伝え、教育活動に反映させているので、地域の理解が高い。

（3）改善策

- ①重点目標についての理解度は 52.4%で、理解が十分とはいえない。教職員や地域の関係者が、共有する目標をより明確にする必要がある。地域、保護者に、目標があまり浸透していない可能性があるため、伝え、広がるように保護者会で分かりやすく丁寧に伝えるなど、普及活動を強化していきたい。
- ②学校公開期間に進んで参加している割合は高いものの、より多くの地域住民や保護者の参加を促進していきたい。特に、地域住民の教育活動への参加意識を、更に高めるように取り組んでいく。地域に関するテーマでの授業や地域イベントとの連携などを取り入れていく。学年ごとに年間を見通して、ゲストティチャーを活用した学習等の計画を立てていく。
- ③地域運営学校としての活動は評価が高いが、地域の企業や人材を活用した体験学習など、より多様な地域資源を教育に取り入れる方法を模索していく。学校運営委員会や学校支援コーディネーターの協力のもと、広くその企業や人材の情報を集めていく。

5 健やかな体づくり<非認知能力・創造する力>

(1) 評価結果

【保護者アンケート調査から】

- 本校が体育朝会や運動遊びの交流（異学年交流）、外遊びに取り組んでいることは健やかな体づくりに効果があると思う。（92.1%）
- 子どもは、体力の向上や健康な生活を取り組んでいる。（79.1%）
- △本校が、これからの時代を創造するために必要な力を明確にしてその育成に取り組んでいることは、よいことだと思う。（59.6%）

【児童アンケート調査及び東京都統一体力テストの結果から】

- 私は、すすんで体を動かしている。（75.6%）
- 「握力」の数値が2年生以外の学年で全国平均値より高い記録もしくは全国平均と同程度の数値であった。
- △「反復横跳び」の数値が5年男子を除いて全国平均値を下回っている。
- △2年生女子のすべての種目の記録が全国平均を下回っている。
- △「ソフトボール投げ」の数値は、全国平均と同程度の数値であったが、平均よりも下回る学年も見られた。

【学校の自己評価から】

- 栄養士や養護教諭を中心とした食育や保健・健康教育を充実させ、児童の健康に関する意識を高めている。（96%）
- 教育目標の目指す子ども像に近づいているか。「健康でつよい子ども」（72%）
- 体育朝会や異学年の運動交流を実施することにより、運動に親しみとともに、自ら進んで運動に取り組む姿勢を育てている。（86%）

(2) 考察

・【学校の自己評価から】

- ・体育朝会を年間指導計画の中に位置付け、体育的な内容や様々な運動を計画的に取り上げ、児童の運動への興味関心をもたせるようにし、学校での運動機会の確保により、児童の外遊びの習慣の向上が見られた。結果、すすんで体を動かしていると回答した児童が多かった。
- ・東京都統一体力テストの結果から、全学年で反復横跳びに課題があった。そのため、瞬発力・俊敏性を向上するための取り組みが必要である。ソフトボール投げの数値は、全国平均と同程度の数値であったが、平均よりも下回る学年も見られた。運動経験や運動機会の少なさが要因として考えられる。

(3) 改善策

- ①体育朝会をきっかけとして、より運動に興味をもって取り組めるような内容を検討する。体育朝会で体験した運動を休み時間等にも取り組めるよう用具の種類を充実させ、場の設定をし、運動に慣れ親しませる。
- ②異学年交流を通じて、高学年児童が中心となって体を動かす時間をとる。本校では「なかよしタイム」

として異学年で運動に慣れ親しむ時間を学期に3回程度実施している。そこで、運動をする時間を確保するとともに、ボール投げゲームや鬼遊び等の運動遊びを高学年から低学年への運動を教えることを通じて、協働的な学びの充実を図っていく。

③体育の授業力向上のため、OJTで体育指導の方法について教務主任と連携をとり、若手教員に伝える時間を確保する。そのために、OFF-JTに積極的に参加して指導力の向上を図る。また、全教職員が見られるようにし、資料等をチームスやロイロノートなどの、ICT機器の活用をしての提示をして、効率よく時間を確保し、働き方改革の視点にも留意する。

6 学校における働き方改革の推進

(1) 評価結果

【学校の自己評価から】

○校務分掌が適切に分担されている。(71%)

△カリキュラムマネジメントによる指導の工夫や、文書作成・印刷・配布等のICT活用による時間削減等に取り組み、教員の質の高い学びと持続可能な学校の実現のための創造的な時間の余白を生み出している。(64%)

(2) 考察

・「校務分掌が適切に分担されているか」という問い合わせに対し、「とても思う」「思う」の割合が前年度は、57%であったが、今年度は71%と大幅にポイントを上げることができた。年度初めより、業務の整理を行っていったことによる成果だと考えられる。業務内容に偏りがないよう、ヒアリングを中心に調整している。

・「余白を生み出しているか」という問い合わせに対しては、64%という結果でやや低めだと考える。この項目は今年度から追加されたものであり、昨年度と比較はできないが、改善が必要である。1年間の予定は、前年度に決められており、多岐にわたる諸会議の日程や時間を改めて設定し直すことが困難であり、余白の時間を新たに作り出すことができなかった。ただし、今まで会議の開始時刻の提示のみであったが、年度途中から会議終了目安時刻を周知することにより、会議時間が大幅に長引くことは解消された。

(3) 改善策

①校務分掌の組織の見直しと各種会議の精査

・三部会を軸に、仕事内容が同程度の分掌を3つに分けることで、同じメンバーで必要性に応じて複数の会議ができるようにする。そのようにすることによって、会議の数が減り、時間の軽減や余白の時間を作ることが可能となる。また、これまでの慣習でなんとなく行っていた会議がないか、改めて企画会等で再考する必要がある。

②校内研修の充実

・特別支援、教科指導等の研修や教員塾を実施する際には、必ず事前にヒアリングを行い、時期とニーズに合った内容とする。